

編集後記

国際言語文化研究科では毎年夏に公開講座を開催しています。今年度は、「恐怖を読み解く ― 日々の生活から国際政治まで ― 」というテーマで、6月14日から7月14日にかけて、毎週水曜日と金曜日の18時30分から20時まで、名古屋大学の文系総合館カンファレンスホールで行われました。

なぜ恐怖なのか？少し説明が必要かもしれません。

最近よく耳にする言葉に「テロリスト」というものがあります。これはテロル（恐怖）を引き起こす人というほどの意味であり、現在、地下鉄の乗客も議事堂の政治家も、ロンドンでも名古屋でも、みな恐怖に直面しているわけです。しかしまた、人間はずっと恐怖とともに生きてきたとも言えます。恐怖の対象も千差万別です。そして恐怖を語ることは、ただ単に感情的に反応しているのではなく、それは、掛け替えのない人への思い、文学表現や歴史認識、宗教信条、それに政治的主張や社会的不満など、様々な要素と連関しています。きわめて個人的に見える一つの恐怖の表明も、それを掘り進んで行くと、時代や地域、さらには一つの文明の特徴さえ明らかになってきます。

こうした趣意のもとに、次のようなプログラムが組まれました。

- 第1講 福田真人「疾病と医学と：日常の恐怖」
- 第2講 布施哲「テロルの構造」
- 第3講 エドワード・ヘイグ「現代イギリス社会に見られるマスメディアと恐怖」
- 第4講 長畑明利「チャールズ・ブロックデン・ブラウンの恐怖小説を読む」
- 第5講 西川智之「村上春樹と暴力」
- 第6講 藤井たぎる「グールドはテロリストか？」
- 第7講 飯野和夫「西洋思想にみる恐怖」
- 第8講 松本伊瑳子「西欧人男性の去勢恐怖と西欧世界」
- 第9講 ギャランス・デュクロ「フランス・ピレネー地方の家族と恐怖 ― 〈善良な未開人〉か？ ― 」
- 第10講 田所光男「民族の共生と恐怖 ― ユダヤ人の喜びと苦しみ ― 」

本号は、この公開講座を基礎に、他の先生方のご寄稿も得て編まれたものです。

『言語文化叢書』は、国際言語文化研究科の情報公開の一環として、電子版〈<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/sosho/sosho.html>〉もあり、今回も掲載論文をPDFファイルで読むことができます。毎号、その作成の労をとってくださる松岡光治先生に感謝致します。

また、今回の編集作業は、博士後期課程在籍のソ・ヨンスクさんに手伝っていただきました。ありがとうございました。

(田所)